人と人　地域をつなぐ　アートがつなぐ
茅野市民館のカルチャー情報紙

わっか

VOL. 02
2024.06
茅野市民館サークル
TAKE FREE

わっかなヒトビト　座談会は第2弾にして、めちゃぜいたくかつ意外な人選に波及していきました。

2023年末のM-1グランプリの決勝大会に残って私たちをドキドキさせてくれた漫才コンビ「ダンビラムーチョ」のツッコミ担当・原田フニャオさん。2022年に二ツ目に昇進し、諏訪地方でも精力的に高座を行なっている落語家・古今亭雛菊さん。東京藝術大学を卒業したばかり、落ち着いた雰囲気とフレッシュさが同居する日本舞踊家・松本幸才さん。こんな顔ぶれをよく茅野に集めたものだ！　舞台を活動のベースとする共通点を持つ3人は、地元に凱旋する日を夢見ています。フニャオさんの元カノが実は雛菊さんの同級生だったという衝撃の事実はまた次の機会があったら。

――フニャオさんがお笑いに目覚めたのはいつごろですか？

原田　僕ら世代は漫才と言えばM-1です。お笑いがめちゃくちゃ好きで、将来はお笑いに関係する仕事へ就けたらいいな程度の思いはありましたが、芸人になろうとまでは思っていませんでした。大学に行きつつ吉本興業の養成所（NSC吉本総合芸能学院）にも通えたらと東京に出たんです。相方が大学の友達で。二人ともお笑い好きで仲良くなって、一緒にNSCに通っていました。そんな感じで昼は養成所、夜は大学という生活を送っていましたね。

――芸人になると決意された、最後のひと押しはなんだったんですか？

原田　先生にネタを見せる授業があって、わりと僕ら、同期の中でも褒めてもらっていたから、これはイケると思い始めたんです。NSCを卒業した後は全員が吉本に入れるので、就活もしなくてまあいいかみたいな（笑）。友達も芸人ばかりだから居心地もよくて。僕らめっちゃ売れるんだろうなと。でも、デビューした年に出た賞レースは、1回戦で先生たちに見せたネタをやって優勝する気満々だったのに、もう誰も笑わない。意味がわからなすぎて。その時にえらい世界に入ったと思いましたね。

一同　笑い

――とは言え今やM-1のファイナリストです！

雛菊・幸才　年末見ましたよー、M-1。

原田　嬉しいです。一昨年は敗者復活前の準決勝で異様にウケて、世間に俺らの名前を覚えてもらえた感じがありました。それがブースト（増加させる）になって。2023年末の予選はお客さんがすごい楽しみにしてくれて、めちゃ笑ってくれました。心をつかめたと思えたほどです。決勝は待ち時間が長くて、まだかまだかと疲れてしまいました。

茅野市民館サークル
情報紙
『わっか』

茅野市民館や、この地域で、日々生まれている多様なアートの交流。そんな「アート」を切り口に、「茅野市民館サークル」が取材・インタビューに出向き、レポートをお届けする、「人と人　地域をつなぐ　アートがつなぐ」情報紙です。

古今亭雛菊 × 松本幸才 × 原田フニャオ

——雛菊さんは大学で落研に入られて、落語家になられるまでの流れが劇的すぎます。

雛菊　私はサークル勧誘のときに、落研のブースでポケモンのクリアファイルをくれたので入りました。そんなだから落研らしいこともせず、寄席にも出かけたことがなかったくらい。卒業が近づいて、1回くらいはと出かけてみたのですが、そのときに現在の師匠の菊之丞がトリを務めていました。そして、この人は私を変えてくれる人だとピンと来たことで、その日のうちに弟子入りを志願したんです。

——2023年には二ツ目になりました。何か変化はありますか？

雛菊　いえいえ、今も修業期間であることは変わりません。真打になるまでは師匠優先です。落語家は前座見習いの時代に、芸人としての了見を育むんです。でも落語界は歌舞伎のように師弟に血縁があるわけではありません。いわば師匠は見ず知らずの赤ちゃんを育てるわけですから、並大抵の苦労じゃない。NSCは入学金を払いますよね？　でも私たちは無料で落語を教えていただく。なんなら食事までさせていただく。だからこそ師匠の身の回りのお世話をさせていただくんです。私は本当に物事を知らなかったから師匠はすごく苦労をされたと思います。だから本当に伝統の世界に入ってよかった。

——幸才さんは代々続いたものを受け継いでいるというお立場ですよね？

幸才　はい、祖母が踊りの師匠で、3、4歳のころからやっています。とはいえ祖母は厳しいわけではなかったのでずっと好きで続けてきました。ほかにもスピードスケートやテニスをやったり、ピアノを弾いたり。ただそのままだと将来どうなるのか想像がつかなかったのも確かで、あるとき祖母のお弟子さんから東京藝大に日本舞踊専攻があると教えていただき、ピアノが好きだったこともあいまって興味が湧いて受験しました。大学でいろんな分野でプロを目指す方々に出会うことができ、刺激も受けたし、美術や音楽でも共通するところもあったことで、自分で創作することにも惹かれていきました。

昨年（2023年）7月15日、諏訪市文化センターでの二ツ目昇進披露公演より（撮影：武藤奈緒美）。今年（2024年）6月には茅野市民館でも二人会があり、ふるさとで雛菊さんの高座を楽しめる機会も増えています。

長唄『娘道成寺』を演じる幸才さん。幼少時は市民館の「伝統文化こども教室」にも参加してきました。昨年（2023年）11月の「幸延の会 おさらい会」では、「花粉」に扮した斬新な創作舞踊や、久々の『茅野カブかん囃子』と、多様な演目で地元を喜ばせました。

それぞれの表現の違いは？

——皆さんに共通するのは舞台に立っていること。ネタや噺、振り付けはどうされているのか興味があります。

原田　ダンビラムーチョの場合は相方が台本を考えて、僕はそれに対して「こういうのはどう？」「こんな感じだったらウケるかもよ」とアドバイスをする役割です。

雛菊　私、落研時代に漫才に挑戦したことがあるんですけど、自分勝手なのでみんなに嫌がられていました（笑）。落語には古典と新作があって、私の師匠が古典を大事にしていることもあって私も古典をやっています。基本的に師匠から口伝えで教わり、録音して、ノートに書き起こしながら覚えています。

幸才　日本舞踊も口伝えです。日本舞踊は流派があって、私は歌舞伎役者・松本幸四郎さんが家元の松本流。つまりお家元の型をいただくんです。松本流は幸四郎家元の曾祖父の助言から、祖父の初代白鸚さんが始めており、長い歴史があります。

原田　へえ、そうなんだ。僕らは思ったことを言えば、それが色になる。お二人は既存のものをやる。それって自分の色を出すのは難しくないですか？

雛菊　落語の場合は同じ噺であっても、受け継がれる中で、落語家それぞれの解釈の違いが表れてきます。そこに個性が出てくるんですよ。

幸才　前にお家元から「努力して受け継いでいると思っても、どこか違うところがあり、そこが個性になる」と伺ったことがあるんです。舞踊も受け継がれてきたものを踊る場合、隠し切れないものがにじみ出てくるということでしょうね。

原田　お客さんに披露する共通点はあるけど、こんなにも違うのは面白いよね。雛菊さんは新作落語は一切やらないんですか。

雛菊　つくってみたいとも思うんですけど、しんどいかな（笑）。

原田　好き嫌いみたいなものなんでしょうね。幸才さんは？

幸才　私は古典からヒントを見つけることを意識しています。曲の構成を分析して、それをお手本に考えてみたり。でもお客様にどう見ていただけるかはやってみないとわからないし、そこでまた気づきがありますね。大学でも先生の前で発表する創作試験があって、踊ってお見せするんです。日ごろから舞台を観たり、学びながら創作したのが『花わずらい』という踊りでした。

——古典も今を基準にするから古典なだけで、生まれた瞬間はコンテンポラリーですもんね。

幸才　そうなんです。古典の曲ができたころは、その時代の流行りだったはず。端唄の流行曲の一節が取り入れられたり、三味線の奏法で流行したものを入れ込んだというような作品もいっぱいあります。

——漫才は先輩がつくったものをやるというのは聞いたことがないですね。

原田　そんな発想はないっすね。例えばやすきよ（横山やすし・西川きよし）がつくったものを真似しても絶対に超えられない。意味合いは違うけれど志村けんさんの「アイーン」とか谷啓さんの「ガチョーン」とか、何か振られたときにやれる一発ギャグがあるのはうらやましいですね。

雛菊　落語は誰でも覚えればできる。でも素人さんと私たちの何が違うかと言えば、修業期間を経ていることじゃないかな。その期間に大概の人が屈折する（笑）。だったら普通の人が語るより、私たちのようなおかしな人の話を聞きたくないですか？

一同　笑い

目指すはオリラジの藤森慎吾さん?!

——それぞれ近い目標を教えてください。

原田　優勝したいなと思いますね、M-1で。何か爪痕を残すのが今年の年末の目標です。そこまではなんとか行きたい。

幸才　私はやっぱり花道がある大きな劇場で自分の会をやりたいですね。国立劇場とか、そういう劇場でこそ、やっぱり日本舞踊は映えるんです。

雛菊　次の目標としては真打？　でもあと7、8年はかかります。忙しいのはあまり好きじゃないので、地道に、のんきにやっていきたいです。「笑点」に出ていれば別ですけど、業界では大活躍されている落語家さんでも世間的な認知度は高くないじゃないですか。しかもコロナ禍で志願者が減って前座さんがすごく減ってしまったんです。このまま落語が廃れるのは絶対に嫌なので、落語の楽しさを伝えるのが私の目標ですね。

幸才　私もやっぱり日本舞踊を多くの人に知ってほしいという思いがあります。

雛菊　私も踊りや三味線を手習でやっていますけど、日本舞踊は歌に合わせてストーリーがあるので、それがわかれば親しめるんですよね。

M-1 ファイナリストとして全国での知名度も急上昇の「ダンビラムーチョ」。立石公園（諏訪市）でのロケのひとコマ。テレビにラジオにネットに活躍中。劇場ライブにも力を入れています。長野県のテレビ局でも月1のレギュラー番組が始まり、フニャオさんの活躍ぶりを楽しめます。

幸才　そう。それこそ落語も舞踊にできますよね。先ほど申し上げた『花わずらい』も、目に見えない花粉に人間が悩まされる花粉症っておかしいね、という作品です。この作品がいつか古典になって踊ってもらえるようになったら嬉しいです。

雛菊　落語もそうだけれど、日本舞踊も1回来てもらえれば面白さが伝わるんです。

幸才　絶対にそう思います。

——この座談会をきっかけに3人の会を茅野市民館でやったら面白いですね。

雛菊　やってくださるんですか！

一同　笑い

原田　面白そうですねえ。

雛菊　めちゃくちゃ面白いと思います。

幸才　実現したら嬉しいです。

雛菊　でもM-1に優勝するから超忙しいですよね？

原田　まあね！

一同　爆笑

原田　でも地元でやりたいですね。今日はご近所の皆さんと会えて楽しかった。仕事場で同じ長野県出身の方と一緒になったとして長野市だ、中野市だと言われてもイメージも湧かないから正直テンション上がらない。でも諏訪だ茅野だと言われると爆上がり。

雛菊　わかる（笑）。私、去年の7月に諏訪市文化センターで二ツ目昇進の会をやらせていただいたんです。そこで諏訪地域のお客様にもっともっと落語の魅力を伝えていかなきゃって思いましたね。

原田　えー、すごいですねー。僕は高校時代に諏訪市文化センターで落語を見て、どうせ面白くないんだろうと思っていたのですが…

雛菊　ははは！　そういう生徒さんいっぱいいます。

原田　けれど始まって5分もせずに印象が逆転した経験があります。落語すごいです。

雛菊　ははは！　それこそ落語やって漫才やって踊りも見せて、「こんなすごい人たちがいるんだ」と知っていただく会をやりたいですね。

原田　ハハハハ！　意気込みがすごいなあ。でもやりたいね。

雛菊　オリエンタルラジオの藤森慎吾さんは存在だけで諏訪の人たちも盛り上がるじゃないですか。私もそういうふうになりたいんです。

原田　藤森さんのご実家はうちから歩いて5分ぐらいのところにあるんすよ。仕事でたまたまご一緒したときに諏訪の話になって「原田が準決勝に行ったら一緒にイベントやろうな」って。もう決勝にも行ったんですけれども、藤森さんきっと全部忘れている。

雛菊　私の二ツ目昇進の会のときにコメントいただいたんですよ、塾の先生が藤森さんと同級生で。もうちょっとプッシュしていきましょう。ぜひ一緒にやっていただきましょう。

幸才　お二人ともすごいです。実現できたらすごいですね。

（聞き手：いまいこういち、撮影：五味貴志）

原田フニャオ　1989年5月19日、長野県諏訪市生まれ。NSC東京校16期生。相方の大原優一とは大学の同級生で、2011年4月にコンビ「ダンビラムーチョ」を結成。「キングオブコント」では、2020年～2022年準決勝進出、「M-1グランプリ」では2018年、2022年準決勝、2023年決勝進出を果たした。現在、山梨放送「てててTV」毎週レギュラー、長野朝日放送「駅テレマルシェ」月1レギュラー出演している。

Harada Funyao

古今亭雛菊　1994年5月21日、長野県諏訪市生まれ。落語協会所属。古今亭菊之丞門下。駒澤大学在学中に所属していた落語研究会をきっかけに落語の魅力を知る。たまたま見た師匠古今亭菊之丞の落語に魅了され、弟子入りを志願。大学卒業後すぐに入門し、前座見習いとなる。前座修行を経て、2022年5月21日の誕生日に二ツ目に昇進。最近では「笑点特大号」に出演するなど活躍の場を広げている。

Kokontei Hinagiku

松本幸才　2000年2月25日、東京生まれ。4歳で長野県茅野市に移住し、日本舞踊松本流理事である祖母・松本幸延に手ほどきを受ける。東京藝術大学音楽学部邦楽科日本舞踊専攻卒。2018年日本舞踊松本流師範資格取得。現在は松本流家元 松本幸四郎師、松本幸龍師に師事。2023年より「幸延の会」主宰。国立劇場にて古典舞踊を発表するなど研鑽を積む。在学中には演出、振付、作詞を手がけた創作舞踊　『花わずらい』を発表。新しい試みにも挑戦する。

Matsumoto Kousa

ちょこっと マメ知識

和の舞台を支える職人の眼差し

話してくれた人：白澤光明さん

大道具などの裏方として様々な会場で長年「和」の舞台に携わっている白澤さん（茅野市在住）に、舞台作りにかける思いを伺いました。

和の舞台には、長い時間の中である程度確立した形式や道具はあるけど、実は難しいこだわりはあんまりなくて、「こんな風に観て・聴いてもらいたい」っていう部分が大事だと思うんだよ。演者さんとお客さんとの関係っていうのかな。

例えば寄席の舞台を作るときに大切なのは、お客さんの目線の高さ。落語でいちばん大事なのは、噺家さんの手元の「扇子と手ぬぐい」でしょ？ それがお客さんから良く見える高さに設定すること。高座って、そのための高さをかせいでいるんだよね。会場によっては、平たい台の上に座布団でも品があっていいじゃない。

昔は仲間と一緒に会議室なんかを借りて、イスを丸く並べてさ、邦楽の演奏や狂言を聴いていただく会を長いことやってたよ。目の前で演奏しているのを聴けるっていうのが良かったな、手作りだけどね。

音楽でも絵でもみんな、自分のやっていることが相手に伝わって初めて完成のような気がするんだよ。芸術大学を出て地元でお披露目したい若い人とか、アマチュアの人たちも積極的に自主公演してほしいし、どんどん発信してもらいたい。そういう場を作り続けたいね。「茅野にこんな人たちがいるんだよ」って盛り立てていきたいですね。

文：しろわいん

わっか Vol.2　ラインナップ

わっかなヒトビト	さまざまなアートのジャンルで活躍をはじめている、地域発のフレッシュな方々にお話をうかがいます。
わっかなコトゴト	茅野市民館でのさまざまな催しものの創作過程を取材し、いろいろな人の声を拾い上げます。
ちょこっとマメ知識	劇場の裏側をのぞく豆知識。和の舞台にまつわるお話です。
こころに響いた表現	アート、音楽、演劇、ダンス…。それぞれの心に響いた表現についてのエピソード。
わたしのまちのお気に入り	街なかのお気に入りスポットをマンガで紹介します。
とっておきの風景	自然豊かなこの地域の「とっておき」を写真で紹介します。
わっかのわ	「わっか」レポーターの編集後記です。

わっかなヒトビト

●このひと ●あのひと ●いろいろなひと

舞台、音楽、文芸、写真、絵画…。いろいろな表現活動や、アートによる地域づくりなど、さまざまなジャンルで活躍をはじめている、地域発のフレッシュな方々がいます。今回は、そのなかから6名の皆さんにお話をうかがいました。

演劇の道へ背中を押した市民館での出会い

波多野伶奈さん

7年前、市民館の演劇ワークショップに参加した“ちゃむちゃん”。今、東京で俳優をしています。昨年は9本の舞台に出演し、一人芝居の企画も手掛けたそう。カフェなど街なかでの上演も増えていて「もっと日常に演劇があってほしい」と願います。

中学で茅野に越してきて不慣れな生活のなか、連れ出された市民館での演劇。「観ていなかったら今、演劇をやっていない」ほどの衝撃の出会いは、茅野高演劇部の公演でした。演劇部の活動が盛んだった高校を選んで進学するも、大会の審査で悶々とし、演劇にも勉強にも身が入らなくなってしまっていたとき、駅通路のポスターを見て市民館の演劇WSに参加します。不満を吐露するちゃむちゃんに講師たちは「いいんだよ！」。周りにはいないタイプの大人と出会い、背中を押してもらったそうです。

ソファーでのんびりしたり勉強する場所だった市民館は、学校とも家とも別の、日常の居場所。興味は“劇場のある空間”へと広がり、大学の卒論も“劇場”をテーマに。制作者への思いもあったが「出演依頼をもらえる間は、それがやることなのかな」と俳優の道へ。「演劇は強固な虚構。俳優の力が強くないと物語が立ち上がらない」と語るちゃむちゃん。演劇と出会ったマルチホールに立つ日を楽しみにしています。

（取材：まきまき、けんちゃん、いちこまい、あとまち）

昨年2023年7月の一人芝居『憶えてるのは言葉じゃなくて』。自ら企画し、脚本も共作で手がけ、カフェで上演しました。

多様な人たちの表現と地域をつなぐ

ツキカラカエル 横田博之さん

富士見町で活動を始めた「ツキカラカエル」の横田さん。知人との縁やリモートワークのタイミングが重なり「気がついたら富士見に」。2021年に移住しました。

仕事で暮らしたニューヨークで、妻となるせいらさん（舞台俳優）と出会い、演劇を観るように。周囲のアーティストの豊かさに触れ、アートが好きになったそうです。

深い歴史を持ち、自然と共生する地域性。大好きな八ヶ岳山麓は「いろんな技を持った人が多い、すごいところ」。公共政策の仕事に携わるなか、公共の補助がもっとアーティストに向けられればと思うこともあり、できることは何かと考え、「表現者と地域、点と点をつなげ、面として発信する」この団体を立ち上げました。

「ツキカラカエル」の由来は、縄文土器に象徴された“月”と“かえる”。「今ここに住む者として、縄文の世界観の大切にしたいことを表現していけるか」という思いから。これまでに、朗読の会や手話サークルなど地元の皆さんとやりとりを重ねながら、怪談話や民話、身体表現・手話・落語のイベントなどを行っています。

より多様な人たちと自由な表現をつくっていきたい。「何かが欠けていることは素晴らしい、という切り口で表現を視聴化していきたい」という言葉に、これからの期待が高まりました。

（取材：おみつ、まゆたん、あとまち、よしたけ）

昨年2023年に開催した「富士見 秋の怪談祭」。晩夏の夜、民話を語り継ぐ地元の方々の朗読に、“怪談師”による噺で、なんともいえない趣きに包まれたそう。これからも継続していきたいといいます。

「世界を明るくしたい」身近なフォトグラファー

五味貴志さん

茅野市宮川で生まれ育ち「30年、ずっと茅野に住んでます」。山と街との距離感、住みやすい空気感。「ほどよい感じのここが好き」と素直な目をして話します。

「茅野の駅前におもしろい活動をつくる“部室”をつくる」という、2012年に茅野市美術館が行ったアート × コミュニケーション企画。その参加者たちと知り合い、市民館に立ち寄ることが増えたのが10代最後のころ。さまざまな仕事をして残ったのがカメラ。「言葉よりもっとダイレクトに伝わる」写真が、自分にしっくりきたそうです。

カメラマンとして独立したのはコロナ禍がきっかけ。「コロナで暗い世の中を少しでも明るくしたい」。写真を撮る仕事は普段行けない場所に行き、普段会えない人に会える仕事。「身近で活動している人、自然、暮らし、日常。らしさのある、いまを撮りたい」といいます。

「例えば『（五味さんに撮ってもらった写真を）プロフィール写真にしたら仕事が増えたよ』なんて聞くと嬉しい。写真を撮ったことで人生を変える瞬間ときっかけを作ることができれば」。言葉は少なく、人懐こい。「そうですそうです」とうなずくその奥に、「相手によろこんでもらいたい」「良さを伝えたい」という確かな思いを感じました。

（取材：あとまち、けんちゃん、まきまき）

今号の巻頭を飾る座談会の写真は、五味さんの撮影。みなさん20〜30代の同世代です。その人のもつ自然な表情を撮ろうとしている様子がうかがえました。

絵と音楽 それぞれの表現を探究

今井孝志さん

岡谷で生まれ育ち、今も暮らす今井さん。絵を中心とした作家活動と、ジャズを基調にした音楽活動、それぞれの表現を試しつづける日々を過ごしています。

グラフィティアートが広まっていった高校生のころ、「行為の痕跡である」線を自分でも描き始めたそう。大学ではジャズ研に入り、ジャズベースを始めました。

「絵はひとりでやり尽くす。時間のなかで起こっているいろいろなことが“釘付け”になっている感じ。音楽はやり尽くす過程をライブで共有しているのかもしれない」。音楽は飲食やダンスなど他の何かとクロスオーバーし、意図しないきっかけを掴みとる面白さがあるといいます。

作品を観る。演奏を聴く。「支えているのは鑑賞者の心。観て、浮かんできていることが大事」。今は飲食店などさまざまな人が集まる場所での演奏が多いとか。「音楽好きだけじゃなく、かけ算で広がっていくのを感じる」といいます。

2005年、市民館のオープニングで高校生バンドとして舞台に立った今井さん。美術館の公募展『メイメイアート』に展示された絵の印象から「尖った感じの人なのかな？」と思っていたけれど、言葉を選んでゆっくり話す様子から、繊細でありつつ人と関わって活動の幅をどんどん広げていける、そんな人柄をうかがえました。

（取材：あとまち、くーちゃん、けんちゃん）

ライブで演奏する今井さん。「時間のなかでいろいろ起こってくる」のがライブの醍醐味。お客さんに「研ぎ澄まされるような感覚を提出したい」といいます。

「言葉は残る」 三十一文字に込める思い

中野霞さん

小学5年の頃、祖母から「短歌のルールは五・七・五・七・七」とだけ伝えられ、ひとり短歌をつくりはじめました。言いたいけど言えないこと、小説や詩だと長い。俳句だと足りない。短歌は丁度いい。単語でもないし文章でもない。定型があって言い過ぎなくていい。

悩むことの多かった時期に、ゴミ箱のような「ネガティブなつくり方」をするようになって、短歌とは少し離れて過ごしたときも。大学休学中に参加した舞台ワークショップで初めて人に短歌の話をし、感想をもらって「詠む意識が変わった」。2019年、連作『拡張子になる』で第62回短歌研究新人賞を頂きました。

短歌をとおして、日常の些細なことに気づくようになったそう。平凡に思えることでも、その一瞬を切り取るとその人にしかない特別なこと。感情の動きは短歌のたねになる。短歌を詠むモチベーションは「死ぬのがこわい」。「でも言葉は残る」といいます。

今、何度目かの短歌ブームがきているらしい。「ある人にとってはライフライン。短歌に救われることもある、私のように」。最近まで下諏訪で暮らし、今は伊那に。富士見と松本で開く「たんかのかい」は言葉を純粋に考える時間。語り合い、研ぎ澄ませ、やわらかくまぜる。それが楽しいと感じられる場を創り出したいと微笑むその目は、凛としてまっすぐです。

（取材：まゆたん、けんちゃん、いちこまい、あとまち）

「短歌研究新人賞の掲載紙と、手づくりの短歌の冊子です」と、諏訪の人にはなじみのあるパン屋さんの袋から取り出す中野さん。人柄が伝わってきます。

耳を澄ませる 音楽で人間を豊かに

柳平淳哉さん

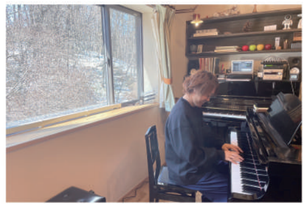
茅野市豊平生まれの柳平さん。子どものころからピアノを始め、音大時代に即興音楽のユニット『いろのみ』を結成。「自然の風景を音で模倣している」「間接照明のような、何かの背景にある音楽になればいい」と独自の音楽を創作、活動されています。

もうひとつ好きなものは「料理」。フレンチ、イタリアン、パティシエなどプロとしての経歴をお持ちのほど。「丁寧さ、時間にシビアなところは音楽と似ている。特にフレンチはハーモニーが重要なんですよ」と、音楽に携わる方ならではの視点をお持ちです。

高校生の頃からの思いもあって、自然あふれるところで音楽を教えたいと8年前に帰郷。今は中大塩で『いろのみ音楽教室』を主宰しています。教室の生徒さん、子どもたちは「共に学ぶ仲間」。「うまくいかなくて悩んでいるときは成長するチャンス」と、ピアノを通して人間としての力を育んでいます。

「偶然出てきたものを肯定する」「予期せぬものと出会う」音楽。「音楽は、耳を澄ませるところから始まる」といいます。“耳を澄ます”とは、相手を知ろうとすること。違うもの同士がバランスを探し、調和していく音楽は「人間が豊かになるために重要なことを秘めている」。その言葉に、強い思いを感じました。

（取材：おみつ、まゆたん、けんちゃん、あとまち）



自宅の音楽教室にて、ピアノに向かう柳平さん。自然あふれる環境で音を奏でています。

アーティスト・イン・レジデンス推進事業
みちのちのダンススケープ

森下真樹 × 石川直樹
みちのちの 10 SCENES

■みちのちのダンススケープ
2021 年度〜2023 年度　茅野・諏訪地域
アーティスト
森下真樹（振付家／ダンサー）、石川直樹（写真家）

■みちのちの 10 SCENES
［ダンス・パフォーマンス］
2024 年 2 月 18 日（日）茅野市民館マルチホール
［石川直樹 PHOTO POSTERS プロジェクト］
2024 年 2 月 7 日（水）〜2 月 18 日（日）
諏訪地域 各所、茅野市民館

※アーティスト・イン・レジデンス（AIR）
アーティストが一定期間ある土地に滞在し、常時とは異なる文化環境で作品制作やリサーチ活動を行う取り組み。「みちのちのダンススケープ」は茅野市民館と NAGANO ORGANIC AIR（信州アーツカウンシル）が協働して実施しました。

主催：茅野市民館指定管理者 株式会社地域文化創造
共催：信州アーツカウンシル
（一般財団法人長野県文化振興事業団）、長野県

「みちのちのダンススケープ」3 年間の取り組みは web で紹介しています
http://www.chinoshiminkan.jp/ccc/michi-no-chino/

振付家／ダンサーの森下真樹さんと、写真家の石川直樹さんが、諏訪湖から八ヶ岳におよぶこの地域一帯に通い、リサーチを通して触れた「未知」をもとに滞在制作する事業「みちのちのダンススケープ」。湖畔へ山頂へと駆けめぐり、地域と交わり、この地を全身で体感してきた3年間の集大成として2月、『みちのちの 10SCENES』が行われました。

石川さんがこの地の「未知の風景」をとらえた写真10枚を、フォトポスターにして掲示するプロジェクトでは、93箇所もの店舗や施設が参加。最終日の18日には、その写真群を扉にした、森下さんと石川さんの構成・出演によるダンスパフォーマンスを、市民館で上演しました。

舞台には、ワークショップに参加してきた市民、飲食店で出会った地元の木遣り師、地域ゆかりの音楽ユニット「いろのみ」も参加。この地で出会った人々のエッセンスが溶け込んだ、ここでしか実現できない作品が生まれました。

森下真樹さん
ふとしたひとこと
（自分が）枠にはまってるなって感じることもあるんだけど、こうしてダンスしている皆さんを見てると新鮮な気持ちになって、自分もみんなも「100 人 100 様」、そうだそうだって、なります。

石川直樹さん
トークでのひとこと
世界はひとつでも、人の数だけ見ている風景はちがう。風景は変わっていく。でも記録しておけば残る。これからも諏訪・茅野に通い、撮りつづけていきたいです。

写真とダンス、それぞれのワークショップでコラボレーション。打ち合わせ中の石川さん、森下さん。

一人ひとりの声から浮かぶ市民館でのアートなできごと

わっかなコトゴト ●このこと ●あのこと ●いろいろなこと

今回は、茅野市民館でのさまざまな催しものの創作過程に同行し、アートの現場を取材して、いろいろな人の声を拾い上げてみます。

舞台を観たり、展示を鑑賞したり、日常からすこし離れてアートを楽しむ機会は、日々の生活に彩りや新たな視点を与えてくれます。市民館では、そういった「アートをつくる現場」の近くに地域のみなさんがいます。

アーティストやプロのやりとりを間近で感じ、表現活動や創作に取り組む人、地域に届けるサポートをしている人。関わりあう一人ひとりの「声」をつないでみたら、時間と空間をともにして何かが生まれる「コトゴト」の全体像が、浮かび上がってきました。

諏訪地区高等学校演劇連盟
第 15 回冬季合同公演
「Angel Tear ～人形の見る夢～」

2024 年 2 月 11 日（日）
茅野市民館マルチホール

主催：諏訪地区高等学校演劇連盟
共催：茅野市民館指定管理者 株式会社地域文化創造

シアターランポンの
武居卓さん
僕は終わったあと、いつも「もっとどうしたらいい？」って思っちゃう。ネガティブ。だけど次の作品への意欲につながるかなって。

兵士に指導者が命令をくだすシーン。シアターランポンの武居さん、草光さんが「ちょっと試しにこうやってみようか」と一緒に創る。

公演後の打ち上げにて…

シアターランポンの
草光純太さん
演劇は見えないものを共有していく、バトンをつないでいく行為。これをどう次につなげていけるか、ですね。

演劇部の 1 年生
先輩たちの背中を見て、ランポンさんのアプローチの仕方も吸収できたかな。来年は脚本・演出やってみたい！

演劇部顧問の先生
演劇って生きもの！ 意味不明、未知。どっちにいくかわからない。いろんな反応にぶつかって、爆発？ その反応がすごく起きるのが合同公演だなって思いました。

諏訪地区の高校演劇部が学校の枠を越えてともに舞台をつくり、市民館の大きなステージで上演する、諏訪地区高校演劇連盟の合同公演。今年で15回目の取り組みです。今回は岡谷南、諏訪清陵、諏訪実業、茅野、東海大学付属諏訪の5校から25人が参加し、2月11日に生徒の潤色を加えた演劇『Angel Tear～人形の見る夢～』を上演しました。

コロナ禍で公演中止を余儀なくされた2年を経て、合同公演の経験者がいないなか手探りでゼロからつくった前回。今回は県の助成事業を活用し、松本の劇団「シアターランポン」の武居卓さん、草光純太さんが指導に入りました。12月から稽古をはじめ、本番4日前に小屋入り。みんなで創作に励みました。

技術（照明）スタッフの
藤森さん
ぎくしゃくして歯がゆいことも経験しながら、みんなと一緒にどうやっていけるか。今回の生徒さんたちはそんな試行錯誤をしていたと思います。「次の人たちがもっとやりやすくなるように」と考えているのが伝わってきました。

小平さん「公演を観ました」

2020 年に市民館で行われた関東大会を観て、高校演劇のファンに。熱量があって全速力って感じで、合同公演も復活した前回から楽しみに観ています。一回かぎりの生の舞台。みんなで向かう真剣さがあるから生まれる本番マジック。今回は、いつかは訪れる死と別れのせつないお話。でも見終わってかすかな希望も感じました。忘れないこと、思い出を語りあうこと。「一番悲しいのは忘れられた女です」。マリー・ローランサンの詩の一節が心に浮かんできた。知らない世界に運んでいってくれた舞台でした。

平林さん「稽古を見学しました」

12 月から 1 月にかけて何度か稽古を見学しました。一つひとつのシーンを演出・演者・大道具と、皆で考えどんどん意見を出し合って創っていく。そのやりとりをじっと聞き、タイミングをはかりながら要所で、ランポンのおふたりが様々なアドバイスを丁寧につかみ熱く伝える。具体的な場面解釈の投げかけから、演劇創作の根本的な話まで。一人ひとりの主体性を尊重しながら、時間や空間をも俯瞰した視点で語られるプロの言葉に、生徒さんたちの表現が何かをつかんだようにいきいきしていきます。共同作業を重ねる中で、物語の世界がだんだんリアルに立ち上がっていくのを感じました。

『みちのちの 10 SCENES』ダンス・パフォーマンスより、「御小屋山 諏訪大社御柱祭」。

ワークショップ参加者のなかから「みちのちのダンサーズ」が舞台に出演。クリエイションの様子。

フォトポスターを掲示
富士見町「mountain bookcase」
石垣さん
『みちのちの 10 SCENES』ポスタープロジェクトに賛同し、石川直樹さんが諏訪地域と八ヶ岳の魅力を撮影したポスター 10 種類のうちの 4 点を店の正面のガラスいっぱいに貼らせていただいたのですが、諏訪地域がまるでひとつの大きな美術館になったようなこの企画で、その一端を担うことができたことがとてもうれしかったです。

木遣りで参加した
加藤さん
今回、ダンスと写真と音楽と木遣りのコラボと聞いて最初はイメージできませんでしたが、それぞれの人を惹きつける力が見事に融合されていて心が震える貴重な体験ができました。また、舞台を支えるスタッフの皆さんの動きがかっこよくて「プロだ…」と密かに感動していました。

中村さん「写真ワークショップに参加しました」

石川さんによる諏訪清陵高校・附属中学校での撮影や講演、市民館での写真ワークショップが 12 月にありました。写真 WS での石川さんの講義で印象に残ったのは「ズームレンズは使わず、自分の立つ位置からの距離で」「何を撮るかより、なぜ撮るか」「偶然を写し込む」ということ。見せることを意識した不自然さを嫌い、自分が出会ったものに正直な距離や感情や偶然を表現する。写真に対する真摯さを感じました。ダンスワークショップの撮影も体験しましたが、暗いステージで動きのある被写体を思い通りに撮るのは大変。ですが、写真のなかに、普段見ることのできない美しい身体の動きや躍動感を切り取ることができました。

坂井さん「みちのちのダンサーズで出演しました」

“ダンス” とは無縁の生活をおくっていた 10 年前、WS で森下さんと出会った。心がうきうきして「私も踊れる」と思ったことを覚えています。
森下さんのダンスはパワフルで細やかで解放感があって、観る人の心を包んでくれる。構成されたダンスなのに窮屈さを感じない。個性を受け入れそれぞれの表現を尊重し、寄り添ってくれる。否定されることのない心地よさのなかで、心も身体も解き放たれる。みな、お互いを認め合い、ひとつのものをつくる楽しさを積み上げていく。石川さんの写真、いろのみさんの音楽、木遣り師さんの声、技術スタッフさんの技、そして観客のみなさん。3 年間の思いをつないで紡ぐ、このときだけの一期一会。ピーンと張りつめ、研ぎ澄まされた時が静かに流れていく。お互いを感じ合って踊るその瞬間の空気感。忘れることはない。

茅野市民館ショーケース 2023
縄文アート
～こどもたちの縄文アートが大集合！～

2023 年 10 月 27 日（金）～ 11 月 15 日（水）
茅野市民館中庭、テラス

提案者：茅野市小中学校
主催：茅野市民館指定管理者 株式会社地域文化創造

茅野市内の小中学生が「縄文」に関わる学びのなかでつくったアート作品を、市民館の共用スペースに展示する『縄文アート』。土鈴・土器・土偶や勾玉のオブジェなど約720点が集まり、秋の中庭に並びました。

展示作業は、市民館のサポーターが企画の提案者である学校関係のみなさんと一緒に実施。作品一つひとつを手にとって、アートを楽しみながら展示しました。

「どんな作品かな」と一つひとつ手にとって展示

展示作業をした
矢﨑さん
展示するとき作品に触れるから、どういう気持ちでつくってるか、どんな工夫をしてるのか、つくった子どもたちと接する感覚がうまれます。

展示に立ち会った
校長先生
サポーターの皆さんに展示していただくことで、子どもたちの作品が「アートになっていく」のを実感します。

日本全国能楽キャラバン！
梅若研能会
茅野公演

■ワークショップ
2023 年 11 月 2 日（木）、3 日（金・祝）
茅野市民館アトリエ
■公演
2024 年 1 月 8 日（月・祝）
茅野市民館マルチホール

主催：公益社団法人 能楽協会
　　公益財団法人 梅若研能会

1月にマルチホールで上演された『日本全国能楽キャラバン！ 梅若研能会 茅野公演』。この能・狂言の舞台に、地元の子どもたちが出演しました。

出演者は野村万作さんをはじめ錚々たる顔ぶれ。出演オーディションを兼ねた能・狂言のワークショップから本番前のお稽古まで、能は青木健一さん、狂言は飯田豪さん、ふたりの能楽師から直接手ほどきを受けました。

ワークショップを見学した
両角さん
研鑽を積み、磨き、深める「型」の芸能。面白い、美しい、そう「見せる」ことは、実はとっても大変。「お客さんに来てよかったと思ってもらえるよう、ある意味覚悟を持つ」。そんなピリッとした一言を子どもたちはどう受け止めて舞台に立ったのか、そんな興味も持ちました。

狂言「茸（くさびら）」に出演した
あおいさん（小 4）
人間国宝の野村万作さんと舞台に立つことにとても緊張したけれど、間違わずにできて楽しかったです。大勢のお客さんの前でするのは初めてだったし、くさびらが難しくて間違えることが心配だったけど、プロの人たちに教えてもらって演じる、ということが覚悟を持つことだと思いました。参加したことはやりがいがあって、勇気をもらいました。

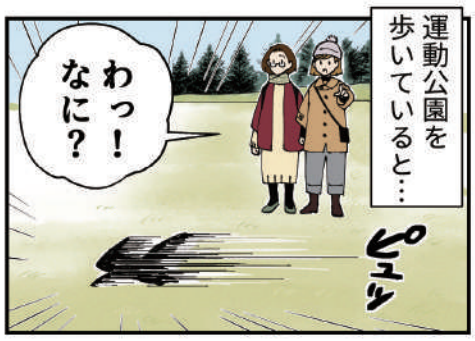
ワークショップを経て、出演することになった子どもたち。能と狂言、それぞれの稽古に励む。（ゆいわーく茅野にて）

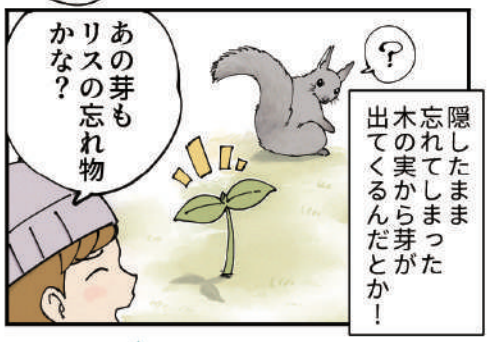
わたしのまちのお気に入り

Chino!

絵：つぼい　エピソード：まきまき

～茅野市運動公園～





【茅野市運動公園のリス】

面積約34haの運動公園には、日本の固有種であるニホンリスが生息しています。まちなかで野生のニホンリスを観察できる公園は全国でも稀。市民ギャラリーでも毎年、愛好家の皆さんがリスの写真展を開いています。散歩中に出会うこともあるかも！ 大切にしたい環境ですね。
（参考：広報ちの 2017年7月号
「特集　運動公園のニホンリス」）

こころに響いた表現

美しい心 大きな心

時広真吾さん

文：なしえだ　書：赤羽淳子

「誰が言ったか覚えがないけれど…」と時広さん。

心に響く言葉があるそうです。それは「美しい心 大きな心」。26歳の頃に出会い、わかりやすく、形や響きもよく、気に入ったそう。今も、節目節目の出会いや経験を重ね、「この言葉が充実してきているの」とおっしゃいます。

時広さん曰く、「正しい」ではなく「美しい」心。美しいと感じるのは、自然、人の言葉、目に見えない人のぬくもりなど、対象があってこそ。「今日これに出会えてよかった、幸せ！」と感じられること。大きな心とは、ひとつの考えに留まらず、理解しようとする心。そのふたつがつながってこそ、といいます。

『平家物語』やダンテの『神曲』に触れてきた中学生の頃。ファッションジャーナリスト時代は、ファッションや芸術一般を取材し、読者に届けてきました。パリコレの取材で三宅一生や高田賢三のショーを見て感銘を受け、滞在中はルーヴル美術館に通い、たくさんの「本物」を見てきた時広さん。見たものを言葉で表現する上で、「本物」を実際に、しかもたくさん見ることが大切だと話します。

今、デザイナーとして美しいものを創り、届けている時広さん。「人生のうちに、心が歓喜する、思い返したくなる情景をこれからもお創りしたい」と微笑みます。

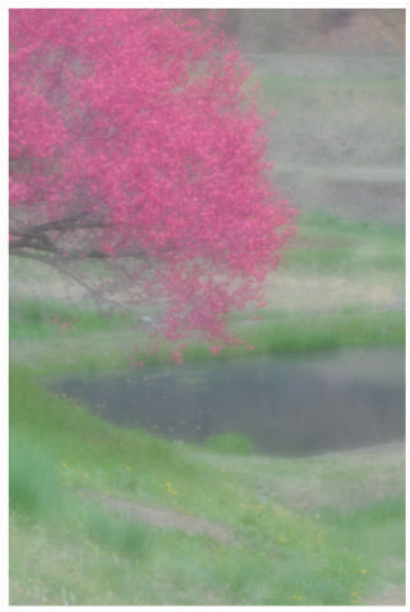
「人間であることの喜び、それがわたくしにとっての美しさ」。

そんな言葉をいただきました。

時広真吾

ジャーナリストからスタイリストへ。1991年、モーツァルトのオペラ「魔笛」より舞台衣装デザインを開始。独自のスタイルは「風が纏う衣装」「挑発する衣装」「格闘する衣装」「文学的抒情」など様々な名前が一流アーティストや演出家から捧げられている。デザイナー、詩人、パフォーマー、写真家そして演出家の顔をもつ。その活動の幅広さから、オールラウンド・アーティストと称される。

とっておきの風景



のどかな里山

写真・話：矢島光明

入笠山や信濃境のあたりは、ちょっと遠出の場所で、子どもの頃から行っていた。井戸尻考古館のあたりには先達、田端、池袋なんて集落があってね。今でも通りかかると寄るんだよ。

これは考古館南側の散策路、花桃がちょうど満開で。５月初旬くらいかな。駐車場を左に降りていくと道を挟んで広場が、あのあたり。とにかくのどか。昼下がりのころなんか特に、人がいなくて静かなんだよ。池があってニジマスを飼っていたり、サルナシの棚があったり。昔はロバが飼われていてね。かわいかったよ。

梅雨の時期はね、入笠山のほうで群生して咲くコアジサイ。そぼ降る雨の日は、なぜかほんとうにいい香りが山中に漂ってるんだ。

編集後記　わっかの わ

●ダンビラムーチョの原田フニャオさん。息子の高校の同級生で以前から応援していて、「わっか」に載せられたらとお名前を挙げさせてもらいました。依頼をした時はまだM-1グランプリに出場する前で快く受けていただいたのですが、インタビューをする時はM-1決勝出場の後。当日は〝わぁ、ファイナリスト…〟とこちらは緊張してお迎えしたのですが、記事でもわかるようにとても気さくでナチュラルで、しっかり笑いも入れてリラックスした雰囲気で話が弾みました。「わっか」だからこそ実現した座談会。この繋がりで次はどんな楽しいことをしましょうか。

（おみつ）

●「わっか」の編集に関わらせて頂く中で、自らインタビューしたり、取材に同行して、多くの方にお話を伺う機会をもらっています。皆さんの話に笑ったり、驚いたり、うなずいたりの楽しい時間はあっという間。毎回、2時間ほどお話を伺っているのですが、文字数に限りもあり、カットせざるを得ない話の数々が残念。文章だけでは伝わらないその人の話し方だったり、仕草だったり、実際にお会いしてわかる、語られる言葉の温度感だったり、そしてその奥に垣間見えるその人となり。みなさんも取材に同行して、知る人のみが知る、とっておきの話に触れてみませんか？

（まゆたん）

茅野市民館サークル情報紙　わっか　Vol.2
2024年6月発行

制作　茅野市民館サークル
発行　茅野市民館指定管理者 株式会社地域文化創造
〒391-0002　長野県茅野市塚原一丁目1番1号
TEL 0266-82-8222　FAX 0266-82-8223

「茅野市民館サークル」は、茅野市民館・茅野市美術館をはじめ、地域の文化芸術に関する情報を共有し、人と人とのつながりから地域の文化芸術活動が活性化することを目指し、2022年に始動した取り組みです。

「わっか」一緒につくってみませんか

茅野市民館サークルでは、市民がレポーターになって、市民館で日々生まれるステキなことや、八ヶ岳～諏訪湖周辺のアートなできごと等々を取材して、情報紙「わっか」やInstagramでお届けしています。
興味のある人、ウエルカム！ 一緒につくってみたい方、どうぞ気軽にお声がけください。

茅野市民館サークル
Chino Cultural Complex Circle
http://www.chinoshiminkan.jp/circle/

Instagram　フォローしてね　@chinoshiminkan_circle